

# 信念の奇跡

目次

# 「何ものをも怖れず」の篇

第一章	私の死生観	7
第二章	本当の生き方	33
第三章	心の大掃除	57
第四章	何をするときでもベストを尽くせ	93

# 「天命と宿命」の篇

第五章	本当の自分とは	139
第六章	天風式坐禅	179
第七章	人生を支配する法則	213
第八章	天命と宿命	239

# 「宿願達成」の篇

第九章 生きがいと喜び……………269

第十章 宿願達成の原動力……………319

第十一章 ひたむきにただ想え、気高く、強く、一筋に……………361

中村天風師 略年譜……………401

函・表紙・扉、中村天風師筆



「何ものを怖れず」の篇



# 第一章

## 私の死生観



みなさん、ごきげんよう。天風であります。

きようは人間一生の一大事、死生観についてわかりやすく説きたいと思います。

もちろんきようのお話は、あなた方にそう思いなさいと強制するんじゃないんですよ。私が現在まで毎日を本当に明るく朗らかに生きている、そのままをお伝えするんです。

お聞きになって、私はそう思えないという人は、あなた方自身で、あなた方の考え方を、あなた方の生命に対してもつてりやいいんです。

ただ、そうかと思える人は、私同様、毎日一日を、本当になにも死を怖れないで生きられる人間になれるだろうと確信します。

これだけ申し上げて、たんとうちよくじゅう単刀直入に、きようの大問題にふれていきますが、人間どんなことをしても逃れることができない死というものに対する考え方は、人間がこの世に生まれた何万年も前から考えてきた問題だろうと思います。

仏教のほうでは、死は思うがままにならないものとして諦観ていかんを説いてますが、そうでなくとも、我々一人ひとりが死について、思い定めた考え方をもつていなきや駄目だめなんです。

そうでないと、今は平穩無事へいおんぶじで、とくに死にそうもないように考えているから安心しちまっているけど、いつなんどき、どんなことが起きるかわからないのが人生だもん。

いつも言ってるように、変化変転きわまりなし、というのが人生であります。きょうはなにごともなくとも、明日もあさってもなにごともないかというところ、そうは言えないんだ。

ちょうど秋の天気と同じで、こんなに立派な秋晴れがあるかと思うくらいに晴れてたのが、数日後にはぐずついているだろ？

人生も同じ。「ああ、きょうは幸いだな」と思っている、ガラリとひっくり返ることがずいぶんあるんだから。

だから、自分が安心して生きられる、しっかりとした人生観をもたなきゃいけない。

自分が本当に安心できる人生観をもたずに生きるのは、羅針盤のない船と同じことになっちゃう。しっかりとした人生観をもたない人は、海図をもたずに嵐に遭って漂流した難破船上に、人生がなんとも収拾のつかない羽目に陥るんであります。

けっして、脅かすわけでもない。

人間の生死というものは、誠にそれはもう、はかり知るべからざるものなんです。

油断も隙もないのが人生だつてことを考えたとき、我々は始終、死生観を自分の頭の中にはつきりもつてなきや駄目なんだ。

そうじゃないと、いざつていうときに慌てくさつちゃって、命を落したり、もつと幸福

に生きられるのに、自分を不幸にしちまうことがあるからね。

率直にまづ言いたいことは、人間はよほどの諦めのできている人間以外は、誰でも死ぬということを怖れます。あなた方も怖れないはずはないと思うけれど、どうだい？

なんで死を怖れるのかというと、これは人間の通有性(注、もともと備わっている共通の性質なんです。)理屈なしに怖れているんだよ。言い換えると、生きてる以上は、どうしても生せいに執着しゅうちゃくするということがあるからなんだ。

「辛いつらな」生せいきたくないな「生せいきづらいな」と思ってる人間でも、「それじゃあ、殺してやろうか」と言ったら、「さあ、どうぞ」とは答えませんよ。生きてるのが辛い人でも、死しにたくはない。生せいに執着しゅうちゃくすればするほど、死への恐怖も強いんです。

あるところに、孫や子どもに嫌われている婆ばあさんがいたんだ。その婆ばあさんが仏壇の前やお寺参りのときに、お念仏やお題目を唱えながら、面つら当あてにこう言いってたらしいんだ。

「どうぞ一日も早くお迎えをお願いします」

そこで寺の小坊主が、この婆ばあさんをいつべんからかってやろうってんで、本堂の須弥壇しゅみだんの下かに隠かくれてた。そこに婆ばあさんが来て、お念仏を唱えながら、

「孫や子どもに邪魔じやまにされておりますから、どうぞ一日も早くお迎えをお願いします」  
と、相変あひわらず愚痴ぐちをまじえながら言つてるのを須弥壇しゅみだんの下の小坊主せうぼうしゅが聞いて、こう言つたんだ。

「そんなに迎えが欲しけりや、今夜迎えに行つてやろう」  
そうしたら、婆ばあさんは急に真つ青まっあおになつて、

「冗談じやうだんも言えないよ」

と、こう言つたつてという話があるんだよ。

誰もが生せいに執着しゆちやくするのは、人間の通有性つうゆうせいで、この執着念しゆちやくねんが強ければ強いほど、死というものに対する気持ちおそが、怖おそれになつてあらわれてくるのは当然です。

しかしそれも、人間の考え方次第しやうだいなんです。

私の家内かないが死ぬ二時間前にだった。死ぬということを知つてたらしいんです。

「長い間お世話せわになりましたが、お先に逝いつてお待ちしますわね」  
と言うから、

「ああ、先逝いつて待つてる。どうせ俺もあとで逝いくんだから」

と言ったんだ。

「今、いい気持ちだろ？」

「本当に安らかな、いい気持ちです」

「もう、間もなく逝くからね。待ってなさいよ」

家内のお手て握って、そう言ったんだよ。

安らかに、それはもう安らかにね、死を怖れずに逝ってくれたときに、「ああ、人間の最

期はこれできやいけない」と私は思ったんです。

しかし、たいいていの人はそこまでいけません。

そこで、私の考え方をあなた方にはつきり言っておきたいと思うんです。いつも念を入れて言っているとおり、これは無理強いすることじゃないんだからね。

私は私の一人決めの考え方で、死を怖れる気持ちを、自分でもこんなに緩めることができたとかと思うほど緩めることができた。その実感をひとつ話してみたいと思う。だから、私とおんなじような気持ちになってお聞きなさいよ。

単刀直入に言うと、はたから見たら死んじまうような運命に直面してるときでも、なんで私が普段と少しも変わらないような気持ちと態度をもっていられたかというね、死を怖れ

る気持ち<sup>せ</sup>を、生<sup>せい</sup>を喜ぶ気持ちにふりかえたからなんだよ。

こう言ってもわからないだろうね。これからわかるように言います。よくお聞きなさいよ。

私は日露戦争の前後、軍事探偵をしていて、支那<sup>しな</sup>や満州<sup>まんしゅう</sup>でもって、命<sup>いのち</sup>がけで暴<sup>あ</sup>れていたんだ。そのときには、死ぬ<sup>しぬ</sup>ことに対してなんの怖<sup>おそ</sup>れもなかった私が、戦争後、重い病<sup>やまい</sup>にかかったから、私の心をしきりなく襲<sup>おそ</sup>ったのが、死の恐怖<sup>おそ</sup>からくる心の憂鬱<sup>ゆううつ</sup>であります。

自分の気持ち<sup>せ</sup>がもうぜんぜん不甲斐<sup>ふがい</sup>なくて哀<sup>あわ</sup>れで、「俺<sup>おれ</sup>はこんな気持ち<sup>せ</sup>でいたはずじゃない」と思<sup>おも</sup>っても駄目<sup>だめ</sup>なんだ。自分でも呆<sup>あき</sup>れるほど、死<sup>し</sup>に対する恐怖感<sup>おそ</sup>が、ひとつのしこりになっちゃって、どうにもしようがないんです。

私<sup>わたし</sup>ほど死<sup>し</sup>を怖<sup>おそ</sup>れなかった人間<sup>にんげん</sup>でさえ死<sup>し</sup>を怖<sup>おそ</sup>れるんだから、あなた方もきっと死<sup>し</sup>を怖<sup>おそ</sup>れると思<sup>おも</sup>うんだが、どうだい？ 大なり小なり感じないかい？ 「どうせ生まれたら、死ぬ<sup>しぬ</sup>んだ」なんて、平気<sup>へいき</sup>でいられるかい？

人と話<sup>わ</sup>してるときは、たいていの人が平気<sup>へいき</sup>でいられますよ。けれど人知<sup>ひとし</sup>れず、一人で夜の寝<sup>ね</sup>際に胸<sup>むね</sup>に手<sup>て</sup>を置いて考えてごらん。

「こうやって今<sup>いま</sup>、生きているけど、やがてこれがなんにもわからない世界<sup>せかい</sup>になるのかしらん」

と思うとき、どんな気持ちができるか。

「ああ、そうなら気楽だろう」と思う人はいるかい？

私は重病に冒<sup>おか</sup>されて死の恐怖にあつたとき、どんなにおかしなことがあつても笑えなかつた。笑う気になれないんですよ。

どんなにうまいもん食べても、どんなに好きな人がそばに来て、笑う気になれない。よく寝られて、「ああいい気持ちだ」と思うはずの朝に目覚<sup>めざ</sup>めても駄目<sup>だめ</sup>なんだ。「どうせ、もうすぐ駄目<sup>だめ</sup>になるんだ」と考えちまう。

これは大病を患<sup>わずら</sup>った人間か、非常に大きな危険を経験してきた人間であればきつと、「ああ、私もそうだ」と感じるに違いない。

ポーツと生きてる人は、ポーツと生きてポーツと死んじまえば気楽だから、かえっていいかもしれないが。

それでもう、寝ても覚<sup>さ</sup>めても忘れない、この死に対する恐怖感のしこりを取りたくて、外国に行く気になったんです。でも、誰も取っちゃくれないんですよ。

それで日本への帰郷を決心したその途上、カイロのホテルで、偶然にもヨガの大聖人、カリアップ先生に巡<sup>めぐ</sup>り会ったんだ。「おまえはまだ死ぬ運命<sup>めい</sup>じゃない。まだおまえは救われる

道を知らないでいるから、俺と一緒においで」と言われて、インドの山の中に入って修行したんです(注、詳しくは『成功の実現』第三章)。

インドの山の中での修行中、毎日の行きと帰りにカリアツパ先生が、私の悟りが開けているかを試すために、いろんなことを聞いてくるんです。

そしてあるとき、死を問題に話を振り向けてきたんだ。

それで、私はこう言ったんです。

「死は、自分で払いのけることのできない心のしこりです」

そうしたらね、こう言うんだ。あなた方も聞かなきやいけないよ。あなた方がカリアツパ先生と問答しているようなつもりになりやいいんだ。

「おまえさんはあれだねえ、ずいぶん死ぬことを気にしているらしいが、なんでそんなに気にするんだい？」

「気にしないでいられませんよ。こんなに気にする人間じゃなかったんですけど、病気をしちゃってから、とつても気になるんです」

こう言ったら、

「気にしても死ぬよ。気にしないで死ぬよ。それをおまえはわからないかい？ 時がく

りや死ぬ。それが人間というものの命に与えられた約束だよ。それは知ってるだろ？」

「それは知ってます」

「どうせ死ぬ運命から逃れることができないのが人間だ。それがわかったら、なにも考えなくてもいいじゃないか。賢いとか馬鹿とか考えなくて死んだほうが気楽じゃないか。いいかい、こうしておまえが一生懸命、私の元で修行して、幸い、今のその病は治るに決まっている。おまえは治らないと思ってるけど、私は治ると思ってるから、こうやって一生懸命、世話してるんだ。治るけれども、全快してもやっぱり時がくれば、どうしても死ななきゃならないんだよ。私の手元で死ななくても、おまえが自分の丈夫な人生をどこかへ行つて生かしても、やっぱり時がくれば必ず死ぬんだよ。それが、おまえがオギャアと生まれたときの約束じゃないか。わからないか？」

「それはわかってます」

「そうだろ。ただ、いま死なないから、ずっと死なないような気楽な気持ちだが、心の隅にありやしないかい？ どっちにしても死ぬということが決まったことなら、死にもしないうちから死ぬことを考えるのは、無駄以上の滑稽じゃないか」

「いえねえ、あなたの言われることはよくわかってるんです。わかっていますけれども、

どうしてもその気持ちになろうと思ってもなれないんで、もう人知れず煩悶はんもんしてるんです」と言ったらね、

「おまえさんの昔の話はあんまり聞いたことはないけれども、あれかい？　今までに、この現在の病やまいが、今よりもひどくなったときがあるのかい？」

「それは、なんべんもあります」

「もうこれで駄目だめだ、これでおしまいだ、もう死ぬんだろうと思うような気持ちを感じたことはあるかい？」

「それはもう、なんべんもあります。それだから、よけいに死ぬことがおつかない(注、怖い)んです」

そうしたら、キャリアッパ先生が私の顔をジーツと見て、こう言ったんだ。

「そのとき、おまえは死んじゃったと思えないかい？　思ったらいいじゃないか。もう駄目だめだと思っただけから、なんべんも浮かび上がってきたために、浮かび上がったことだけを考えている。そのとき、死んじゃったと思えないかい？　すると、現在こうして生きていることが、なんとも言えない感謝以上の不思議に考えられやしないかい、どうだね？

大病なり生死にかかわる事件を体験した人ならば、現在こうやって不思議に生きていたら

ることへの感謝が真剣にできるはずなんだがねえ。おまえ、ありがたいと思わないかい？  
死なないで生きていて、こうやって今、文句を言っていられる。その自分の姿をしみじみ意識的に感覚しながら、それをありがたいと思えないのかい？」

「へえ」

「なんべんも『もう死ぬんだろうな』という経験があつたというんなら、無論、その晩は寝たんだろうね。次の朝、目が覚めて死なずにいたと気づいたとき、どんな気持ちだった？」

「ははあ、それは考えなかつたです」

「罰当たりで考えないんだよ。生きていることが当たり前だと思つてゐるような考え方をもつてゐるからだ。死ぬということの考え方を、少し変えてみたらどうだい？ そうしたら、現在よりはもつとマシな悟りが開けると思うがな。わからないかい？」

「いやもう、おっしゃることはある程度わかつてゐるんですけども、肝心なところがつかめないんです」

「そうかい。死ぬということは、目の覚めない眠りだつていうことはわかるだろう？ 英  
国の言葉で、死ぬことをロングスリープと言う」

「へえ。日本でも『目覚めぬ長の眠り』って言います」

「死ぬことは、なんにも知らないでよく寝てる時と同じじゃないか。だから毎晩、寝るのは、死ぬのおんなじ状態を、ある時間のあいだ、やってるだけのことなんだ」

これは、カリアップ先生の言う言葉ですよ。それを私がかわりにあなた方の耳に入れてい  
るんだけどね。

「やがていつかは永久に目が覚めない死というものへの予行演習を、毎晩やっているよう  
なもんだ。リハーサルをやっているのと同じじゃないか。もつとはつきり言うと、地球上の  
生きてる人間は、毎晩死んで、毎朝生き返っていると書いていい。死ぬということは、命が  
生きていない眠りで、眠るということは、命が生きていないことだけの相違なんだ」  
さらに、こう言うんだ。

「けれども寝ている人間は、自分が生きていなくても生きていないことも知らないんじや  
ないか」

そう言われて、「ああ、そうだ」と思ったんだよ。

私は八十九歳（注、講演当時）になるまで毎晩寝ているけれども、よく寝ているときに、「ああ、  
これはよく寝ているな」と思ったことはないよ。寝ているあいだに命があるかないかを、いさ  
さかも感じてません。もし感じている人があつたら、これから先の話はピッタリいかないよ。

インドの修行中、私が寝起きするのは羊小屋だった。ほかの者は窪みや森の中で寝起きしていたけれど、私だけは、「病気をもっているから特別に優遇してやる」と、羊小屋の中に入れてくれたんだ。

「おまえはよく寝ているとき、自分でよく寝ていると感じているかい？」

「まったく感じていません」

「そうだろうな。夕べ、おまえと一緒に寝ている羊が小屋から出てきたと知らせてきた者がいたから、羊が豹に食われるといけないと思って、私が小屋に入れてやったんだけど、おまえはグーグー寝ていたよ。知ってたか？」

「いえ、存じませんでした」

「知らなかったんだな？」

「はあ」

「本当に死を怖れる人間だったら、毎夜眠ることも恐ろしいはずだがなあ。しかし、おまえは眠ることをちつとも怖れていないじゃないか。むしろ、楽しんでるじゃないか。『さあ、これから部屋へ帰って寝ろ』と言うと、おまえは『グッドナイト』と言って喜んで帰るじゃな

いか。そこを考えてごらん。眠るのも死ぬのも状態は同じもんだ。それを、一方は楽しみ、一方は怖れる。せんじ詰めれば、これは観念の問題じゃないのかい？」

私がしょっちゅうあなた方に言ってる、「心ひとつの置きどころ」っていうことなんです。寝ているあいだに、死んじまつてるかもしれないんだもの。

このあいだも話したろ？

大学を出る息子のいる人がいてね、就職口の世話をしてくれる人のところに、「明日、お父さんと一緒に行こうね」と息子に言っつて、「就職したら、こういう家を建てて、こういうお嫁さんをもたらつて」と楽しみに話してから、息子は部屋に入つて寝たんだね。

そうしてあくる朝、お父さんが先に目覚めて、お茶を飲みながら息子を待つてるんだけれども起きてこない。

「どうしたんだい？ あんなに楽しみにしていたのに、起こしてこいよ」

それで奥さんが起こしに行つてみたら、もう冷たくなつちやつてるんだ。いわゆるシヨツク死というもので、寝たまんまだったそうだよ。よく寝てるのと同じだから、「おいおい」つて起こしたんだけど、駄目だった。

これは必ず、我々にも来るんだぜ。

「あ、いま死ぬ」なんてことはないよ。寝るときも「あ、いま寝ちゃった」っていうことがわからないと同じなんです。

それからもうひとつ、カリアツパ先生にこうも言われたんだ。

「こうやって、私と話しているとき、おまえは生きてるっていうことを考えているか？」

「考えてません」

「夢中で話してたら、自分が生きてるとか死んでるとか考えてないだろう。生きていても、生きてることを考えなきゃ、死んでると同じだ。そこを悟れよ」

これだけ言われて、悟れないはずがなかったよ。ハッと心を打たれるものを感じたんです。

そして、この話で巧みに私の魂の中に注ぎ込んでくれているカリアツパ先生の言葉を聞くにつれて、私の心の中に、戦争時代のいろいろなことが、回り灯籠のように次から次へと浮かび上がってきたんです。

あの日露戦争の前後、私が軍事探偵をしていたころ、敵のコザック騎兵に捕らえられて死の宣告を受け、柱に括りつけられて一発の銃声とともにこの世を去るんだという刹那、救われて逃走した話は前にもしたね(注、詳しくは『盛大な人生』第四章)。

また、こういう話もしたね。万里ばんりの長城ちやうじやうで偵察ていさつ中に狙撃そげきされ、飛び降りたはずみに人事じんじ不省ふせいになって、なにをしても気づかなかつたのが、十数日目に目が覚さめた。それなのに、私は二〜三時間くらい寝たようにしか感じなかつたんだ。どこか高い所から落ちて、人事不省じんじふせいになつた経験のある人はおわかりになる話だと思ひます。

飛び降りたのは、ちやうど高さが丸まるビル注、大正十二年に建てられた旧丸の内ビルヂングのこと。昭和戦前期には東洋一のビルと言われたくらいなんですよ。どうして木こつ端はみじん微塵みじんにならなかつたんだろうと思ふんだが、そのときにちやうどコーリヤン（もろこし）のかきいれどきでもつて、もみ殻がらがうず高く積んであつたからよかつた。それがなかつたら、私はバラバラになつちやつたと思ふんだ。

なんで飛び降りたかというね、ロシアの前衛隊が外門の国境あたの辺りあたでウロチョロしているという情報が入つたんで見ていたんだ。そうしたら、シュツ、シュツと風を切つて鉄砲の弾たまが飛んできたんだよ。

鉄砲の弾たまについていうのは、遠くからくるときには音は聞こえないんだよ、音はあとからゆつくりきやがる。遠くの原っぱのほうで棒杖ぼうじやくいを打つてるのを見ると、打つてから程ほど経へいてからコーンって聞こえてくるだろ。音のほうが遅いんだよ。弾たまの音か風の音か、シュツ、シュツとく

るんですよ。耳をかすめてシュツ、シュツてくるやつが一番危ないんだ。慣れてないとね、危なくない弾たまにも首を引つ込めるんですよ。

上を通って行つちやうんならどうもありやしないんだけれども、一番危ないのは、シュツ、シュツて耳元にくる弾たまなんだ。それがシュツ、シュツてきたから、私は狙われていると思つた。だから、パーッと飛び降りたんだ。もう考えている間まにもありやしませぬ。

やつぱり慣れていたからでもありませんが、両眼鏡りょうがんきょう（注、双眼鏡もなにも手放さないでそのまま飛び降りたとき、証拠品はひとつも残さなかつた。パーッと落つちたときまでは覚えてるんだ。それから先がわからない。目が覚さめたら十数日経たつてたんだよ。

カリアツパ先生と話して、いろいろなお話を聞いているあいだに、このときのことパーッと頭に浮かび出たんだ。

そうだ、あのときに生き返らないでそのまま死んでしまっていたら、死ぬなんてことはなんともないことじゃないか。おつかなくもなんともない。怖おそれる間まもないもの。パッと死んで、それでおしまい。

それが、不思議とも奇跡とも言いようもない運命で、死なずに助かつたんだからね。生き

返ったばかりに、生きてることがなにか当たり前のように思つて、やたらに死を怖れる心になつてしまつたんです。

考えてみると、あのとき死なずに今こうして生きているということが、むしろ不思議以上のことなんです。それを私は横着にも罰当たりにも、不思議とも思わずに、なにか当然の権利のように考えて、やたらと死ぬことを怖がつて、なんとも形容のできないしこりを心につくつて自分を憂鬱にしてたんです。せんじ詰めると、自分の気持ちの中に自分でこしらえたしこりじゃねえか。

それまでの私は、自分の人生を生を重点としてのみ考えていた。それで人生観が、あるいは死生観ができると思つていた。それが断然、間違いの始まりだと悟りが開けたんです。人生は死を重点として考えてこそ、死生観が徹底するということに気がつかなかつた。

これは大事なことから、よく考えなさいよ。

生を重点にするとね、生に対する執着念が盛んに燃え出すんです。

しかし、死を重点とすると、今こうして生きていることのありがたさが、しみじみと感ぜられるんだよ。

「死んじやつたらどうしよう」というのが、あなた方なんだ。よく考えてごらん。死を怖れ

るのなら、生まれる前はおっかなかったかい？

生まれる前、知らねえじゃないか。それと同じように死んでからも知らねえんだもん。

生きてることのありがたさをしみじみと感じて生きると、死というものを怖れなくなるんです。生きてることのありがたさを感じないで、「死ぬのはいやだ、いやだ」と思うのは、生せいが重点となっている。

もう少し、わかるように言おう。

私が万里ばんりの長城ちやうじやうから飛び降りて死んでいたら、現在こうしてあなた方にお目にかかることもできない。それを考えると、今こうして生きてることはありえないことだから、ありがたいことだろ。

日本ではなにかあるとすぐに、「ありがたい」「ありがとうございます」と口癖くちくせのように言うのが常識のようになっていいるから、いちいち意味を考えて使つてないと思うけれども、めつたにないから「有り難あがたし」と言うんですよ。それを、「Thank you very much」と同じふうになんて言えないんだ。

どんな場合でも、「生きています。ありがたい」と思って働いていれば、せっぱ詰まって「もう駄目だめだ」っていうときにも、「俺はまだ生きています」と思えるんだよ。

だから死への怖れではなく、生きている現在のありがたさのほうに、感謝して生きることにしてごらん。

私はそうしようと心に決めました。

インドの山の中での修行中に、そういう悟りが心の中に出た瞬間、スーッと雲の晴れたような気持ちになって、まったく不思議なほど、死というものに対する憂鬱感が薄くなっちゃった。というよりも、その瞬間から消えちゃったんだ。それが、今日まで続いているんです。

それまでの死に対する怖れがあつたときは、夜中なんかでもやたらと目が覚めるんだ。今みたいに、寝たらあくる朝に起こされるまで、もう死んだと同じように寝ているなんてことはできなかったの。

不思議とね、一種の恐怖感というものが頭の中にあると、用もないのに目が覚めるんだよ。そしてチョイと目が覚めるとすぐ、死ぬってことを考えるんだ。

さつきも話したとおり、朝起きて食べてるときでも、心のどこかに死の憂鬱感がしこりのように待っていて、ヒョイと意識的になるとフツと出てきやがる。頼みもしないのに、心の中に妙に出てきやがって、心を暗くするんです。

同感の人がありやしませんか？

どんなにうれしいことがあっても、どんなにうまいもん食っても、嬉しくもない。心が理屈をつけるんだ。「どうせもう、遅かれ早かれ死ぬんだ」って、フウツと暗くなっちゃうんです。もう滑稽なくらいです。自分でつけてる理屈というのが、三文の値打ちもないことなんだけれど、考えてるときは真剣なんだ。

ところが、心の中に尊いヒントを得てからは、どんなときでも生きてる感謝のほうが心に浮かんでくる。それがいつも心の中を明るくしてくれる。死ぬなんてことは、耳にしてもなんとも思わない。死ぬことがショックなことだと感じなくなっちゃったんですよ。

人間は死ぬことを考えなかつたら、恐ろしくもなんともないですよ。人間の観念というのも、こちらを考えたたらその逆は消えるんだから。

人間の心はいちどきに二つは作動しない。喜びながら悲しむことはできない。立ちながら同時には座れない。前に進みながら同時に後ろには進めない。片方を考えたら、もう片方は消えるに決まってる。片方にある観念が出れば、もう片方の観念は消えるんだよ。

だから、死を恐ろしがらない観念が出れば、死は恐ろしくもなんともなくなっちゃう。いやむしろ、快い感じを受けることはあっても、恐ろしいとか、おっかないなどは考えなくなっちゃうんだよ。いつもと同じような感じなんです。

「この人は不感症かしら？ それとも神経が弛たるんでるのかしら？」と思う人もいるだろうけれども、私の神経はあなた方の何倍も敏感だからね。ただ、おっかなくなっちなつちまつたんだよ。「初めっから、この世に生まれてこなかった」と思ったら、なんにもおっかかないことはないもの。

だからあなた方もね、私のこの気持ちと同様になって、考え方をふりかえてごらん。「生まれてこなきゃ生きてない。生まれてきたから生きている。ああ、ありがたいことだ」と。

生きている現在を、ただありがたく感謝して生きたらどうだい。

生きていることだけに感謝して、生きていることだけを考えるんだよ。

生きているんだぜ、息が絶えないかぎり。たとえやがて死ぬであろう臨終りんじゅうが迫つてるときでも、息が絶えないかぎり生きていることだけを考えて、生きていることに感謝して生きるんだ。

これは、はつきり覚えておかないと駄目だめだよ。

「生きていられることに感謝する」という気持ちで生きるのは、大きな哲学だよ。

「生きていることに感謝している人間」は「生きている気持ちの人間」なんだよ。「生きていても死ぬことばっかり考えている人間」は、「死んでる気持ちの人間」なんだ。

ちよつとした言葉だが、ここには大きな違いがあるんです。

この死生観がわかるから偉い人間だとか、わからないから偉くないとは言いません。ただしかし、これが天風の死生観なのであります。

私は、それをそうだと、理屈抜きに自分の信念になって生きている。

いつも冗談半分でこう言ってるだろ、「死ぬことは死んだのちにお考えなさい」つて。実際には死んだのちには考えられませんよ、考える働きがないんだから。

だからただ一途に、生きてることだけに感謝して生きることにしようじゃないか。それでもわからなかつたら、自分に聞いてみる。

「俺は生きているか？ 死んでいるか？」

これは笑い話のようだが、大きな悟りだよ。とくに、病のときや運命に阻まれたとき、よりいっそう、この気持ちをはつきりもつようにしなさい。

「どんな辛いことがあつたつて、生きてるんだ」

ただもう、理屈抜きでそう思いなさい。

ああでもねえ、こうでもねえ、滑った転んだつていう理屈がなんだい。小さな頭の中の脳髓のもつれから出ただけのことじゃねえか。

そんなことはなにもいらないんだ。ただ生きてることをありがたいと思つて、どんな場合でも「ああ、生きてる」、これでいい。

私の家内かないは「生きてる、生きてる」と、生きてるまんまで私の手を握りながら、あの世に旅立った。ここなんだよ。いつも言つてる「晴はれてよし 曇くもりてもよし 富士の山」というのはこういうことなんだ。

なにがあつても、びくともするもんか。生きてるんだ。ことがある日もことなき日と同様、生きてることを楽しむ。

これをあなた方の心に置いてくださいよ。